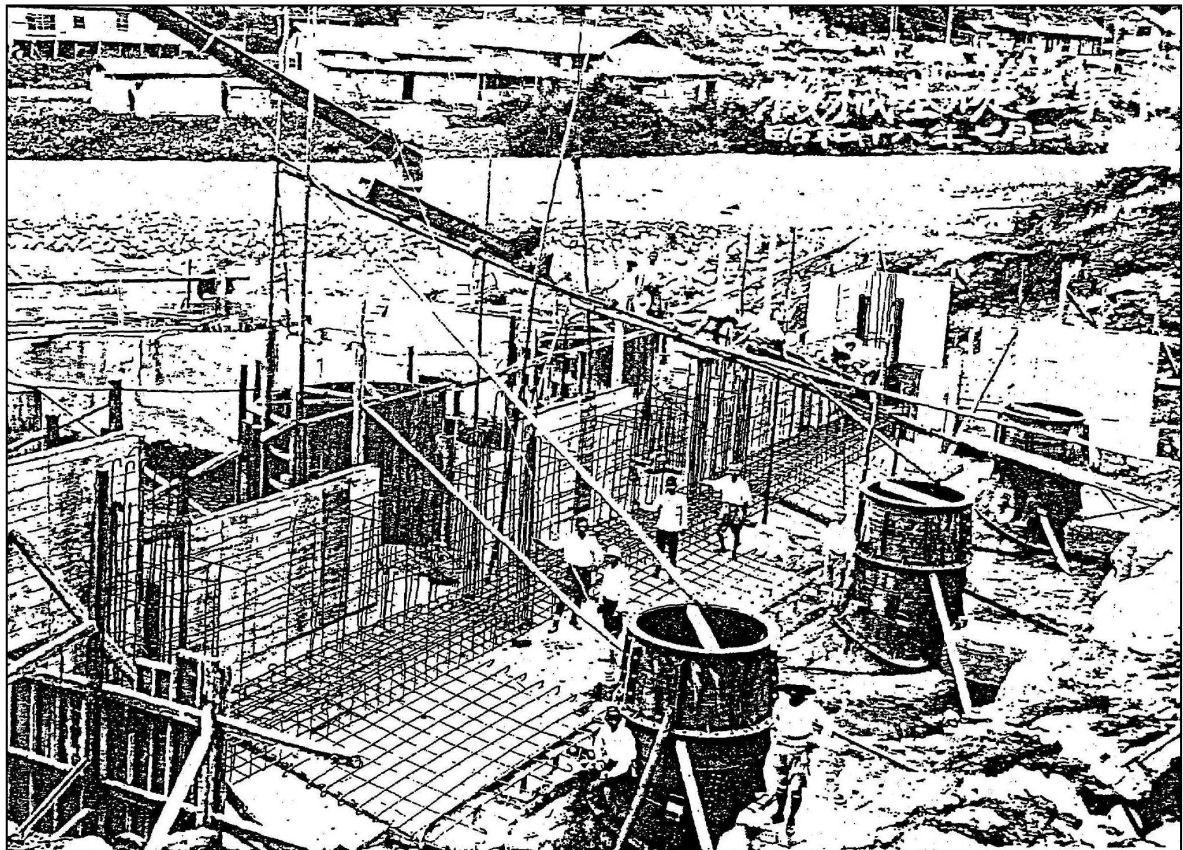


アジア大太平洋戦争期の
島根県雲南地方における韓国朝鮮人の生活記録



2008年11月

日本と韓国朝鮮の市民友好と地域の国際化を考える会

はじめに

今から60数年前、島根県雲南地方において、日本の植民地であった朝鮮半島などから多勢の人々が集められ、ダムや発電所などの発電施設建設工事に日夜、従事していました。そのほとんどの工事では人力に頼り、戦争が拡大する中で、24時間突貫工事を強いられました。また、そこで働く朝鮮人には十分な食料もなく、多くの者が家族と離れ娯楽もない山間部で日々を送っていました。

このように朝鮮半島出身者が雲南の地で働くことになった原因は、戦争が拡大し、軍需生産に不可欠な電力供給に向けて中国山地で発電施設の建設が計画され、若者が次々と戦地へ出征して行く中で、大規模工事に必要な労働力の確保を朝鮮半島に求めたからです。

日韓両国政府は国交正常化40周年の2005年を「日韓友情年」とし、韓国政府が行う日本の戦時徴用などで死亡した韓国人の調査に対し、日本政府も協力を約束しました。

2005年5月、私たちは雲南市木次町の満福寺に眠る韓国人の姜植伊（カンシギ）さんの墓碑の夫金夫介さんの韓国内住所を頼りに遺族搜索を始め、在日韓国民団島根県地方本部、韓国広島総領事館、韓国慶尚南道高梯面役場にご協力をお願いしました。だが、朝鮮戦争の戸籍喪失で調査が進まず、2006年11月に私らが韓国高梯面役場を訪ねたところ、姜植伊さんの四男、金時出（キムシチュル）さんの戸籍を入手したため、ソウルで金時出さんに会い、当時の家族の生活や韓国帰国後のご苦勞などをお聞きしました。

戦後60年以上が過ぎた今日、当時を知る人が少なくなる中で、地域に埋もれた雲南地方と朝鮮半島との結びつきを掘り出した幾つかの事例を紹介をします。終戦後、朝鮮半島出身者で地域に残られた方、他の地へ移り住んだ方々、あるいは朝鮮半島へ帰国した人々の苦難の人生や今に続く課題などを少しでも明らかにし、多くの方々に伝え、これからの日本人と朝鮮半島の人々との友好を考えていく素材が提供できれば・・・という思いです。

そして、日本と韓国の歴史的交流や今後の友好関係を率直に話し合い、ヒトと文化の交流を重ね、互いの信頼関係を醸成し、更なる善隣関係の形成に私らも努力したいと考えます。

この度、雲南地方における日本人を含む韓国朝鮮人犠牲者の追悼慰霊事業を計画し、その事業の一つとして、この記録集を発刊することとしました。これは未だ調査が未了であるため、「中間報告集」であると考え、引き続きの調査対し、ご協力をお願いするものです。

この記録集を雲南地方で亡くなられた韓国朝鮮日本人を含む全ての御霊に捧げます。

注) 本書では戦前の朝鮮半島の人々の呼称を朝鮮人としたが、韓国人との呼称も使用した。

2008年11月

日本と韓国朝鮮の市民友好と地域国際化を考える会
代 表 江 角 秀 人

目 次

1. 近代以降の日本と朝鮮の歴史
2. 近代における島根県在住朝鮮人の歴史
3. 戦前の雲南地方の近代化と朝鮮人
4. 証 言
斐伊川流域における発電所建設工事と韓国朝鮮人
5. 終戦後、韓国へ帰国した金 時出さん
6. これからの私たちの想い・・・

満福寺に眠る韓国人女性の遺族捜索

韓国慶尚南道居昌郡高梯面役場と「金家」実家訪問の旅



(表紙写真) 北原発電所建設工事 1941 (昭和16)年7月

1. 近代以降の日本と朝鮮の歴史

【明治維新から併合まで】

江戸時代における朝鮮と日本の関係は、12回に及ぶ通信使の訪問を受け、対馬から江戸に至る各地で交流が交わされた善隣関係が続いていました。

1868年、王政復古により政治の中心が徳川幕府から明治新政府に移りますが、欧米にばかり目を向け近代化を急ぐ新政府に、対朝鮮の方針は特にありませんでした。したがって、日本は政権が交代したことを知らせ、従来通りの善隣関係を継続するよう申し入れた文書を朝鮮に送りました。ところが、この文書の形式が従来のもので違っていたので、朝鮮側が受け取りを拒否（書契問題）。これが近代の日朝関係における不幸なつまずきの第一歩でした。

明治新政府と朝鮮はこう着状態が続き、この間日本国内の一部に、武力で朝鮮の非礼を問うべきだという征韓論が起きます。1875（M8）年、日本の軍艦雲揚号が江華島を攻撃し、翌年軍事的圧力の下で、不平等条約である日朝修好条規を押しつけました。

そして、朝鮮における支配権をめぐって、日清・日露と二回の戦争に勝利した日本は、完全に朝鮮に対する支配権を獲得します。この間、ロシアに接近した明成皇后（閔妃）を、三浦梧郎らの日本人が王宮に侵入して殺害するという蛮行を行ないました。

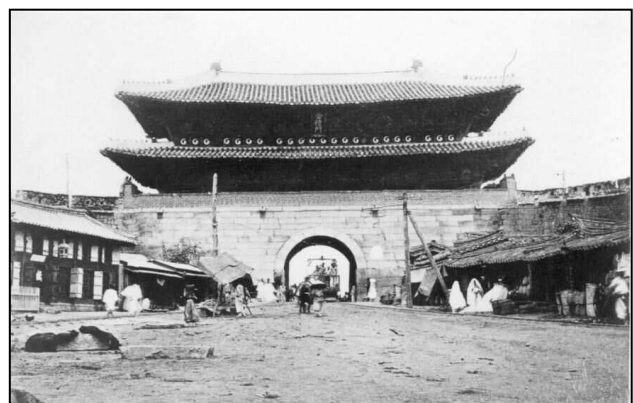
この後、日本は、併合するまでに韓国（1897年大韓帝国に）の国としての機能を奪うことを目的とした条約（日韓協約）を次々と押し付けていきます。まず、日露戦争中の1904（M37）年、第一次日韓協約で日本人財政顧問をはじめとする顧問団を送り込みました。

翌1905年第二次日韓協約（乙巳保護条約）を強要し、外交権を剥奪して実質的な独立を奪い、保護国化しました。1906年になるとソウルに統監府を開設し、伊藤博文が初代統監として赴任し、韓国内政を日本に従属した植民地的なものに再編成することに着手します。併合への準備でした。

1907年第三次日韓協約により、軍隊を解散させました。この時期、下野した軍人や、両班から農民に至る幅広い層からの出身者で組織された義兵が、日本の侵略に抗議して各地で挙兵しました。日本軍は農村を焼き払う焦土作戦で徹底的に弾圧し、ついに1910（M43）年日本軍をソウルに集結させた厳戒体制下で、「韓国併合ニ関スル条約」に調印されました。

【併合後の朝鮮政策】

併合すると朝鮮を統治する機関として総督府を設置し、初代総督は憲兵警察制度による力に支えられた支配を行ないました。武断政治といわれるゆえんです。併合後、直ちに総督府は朝鮮の人々に対し同化政策……民族性を抹殺し、皇国臣民化を図る政策……を実施し、日本語や天皇崇拜思想を強要しました。



南大門（崇禮門）

また、10年近くに及ぶ土地調査事業を実施し、多くの農地、山林を奪い、日本人地主のものにします。中でも最大の地主は、日本の国策会社である東洋拓殖会社でした。土地を奪われた多くの農民達が生活基盤を失いました。

1918（T7）年、日本国内では米騒動が起きて、慢性的な米不足が問題となっていたため、朝鮮で産米増殖計画を実施し、日本への米輸出を増加します。これは文字通りの飢餓輸出でした。生活に困窮のあまり、あるいは土地を奪われ生活基盤を失ったために、仕事を求めて国外へ出ざるをえない人々が増加しました。朝鮮半島北部の人々は、間島（カンド、北朝鮮沿いの中国東北部）や沿海州に、南部の人々は日本へ渡ったのです。

1919年、武断政治に対して朝鮮民衆の怒りが爆発しました。三月一日、ソウルのパゴダ公園で市民が独立宣言書を朗読、「独立万歳」を高唱して対極旗を振りながら市街を行進しました。これを機に朝鮮全土に独立を求めるデモ行進が拡大し、植民地時代を通じて最大の独立運動となりました。

これにより、日本政府は支配政策の転換を余儀なくされ、20年代に入ると「文化政治」と呼ばれる懐柔策に転じました。

【戦時体制化の朝鮮政策】

30年代以降45年までの日本は戦争の時代でした。そして植民地朝鮮も否応なくそれに巻き込まれていくこととなります。31（S6）年満州事変、37（S12）年には日中全面戦争となります。やがて日本は中国戦線でのこう着状態を打破するために、先の見通しを持たないまま太平洋戦争に突入（41年、S16）しますが、その体制作りのために下記の法律を制定し、39（S14）年から「強制連行」を開始したのです。

《1938（S13）年 国家総動員法制定、1939（S14）年 国民徴用令制定》

「強制連行」は三段階に分けられます。

「募集」（39,9） → 「官斡旋」（42,2） → 「徴用」（44,9）

「募集」 日本政府が企業と割り当て人数を協議、企業は指定された地域で行政職員や警察の支援で募集（狩り出し）し、集団で日本へ移送

「官斡旋」 募集で十分な労働力を確保できなくなり、国家権力（総督府）が直接動員する体制に強化

「徴用」 内地在住の朝鮮人に対しては42年10月から「徴用」が始まっていたが、44年9月からは朝鮮半島の人々にも適用、内地へ連行した。

この強制連行により39～45年の間に日本本土へ動員された朝鮮人労働者は70～80万人で、その大半が炭鉱、鉱山、土木工事など危険な仕事に従事しました。食料、衣服の支給も十分ではなく、劣悪な労働条件下で虐待もあり、多くの労働者が命を落とし、負傷したのです。

また、朝鮮人を戦時体制に組み込むために、同化政策は強化され、「皇国臣民の誓詞」の斉唱や神社参拝を強要し、39年には創氏改名令を出しました。日本は徹底した民族性の抹殺を図りましたが、45年敗戦を迎え、朝鮮の人々は日本の植民地支配から解放されました。

2. 近代における島根県在住朝鮮人の歴史

《なぜ、日本へ》

島根のような農村県においても、大正期にすでに数百人の朝鮮人が在住していました。その数は昭和に入ると1000人を越え、以降年ごとに増加していますが、前章で述べたように、こうした日本への渡航者のほとんどは、植民地下の朝鮮では生活できなくなったため、仕事を求めての出稼ぎ労働者でした。

1939年以降の強制連行期に入ると飛躍的に増え、44年には1万9千人余を記録しています。今となっては明確な人数はわかりようもありませんが、これは島根にも強制連行された人々が多数いたことを示しています。

表1 山陰在住朝鮮人

	島根県	鳥取県		島根県	鳥取県
1913 (大正2)	51	4	1929	1645	772
1914	35	4	1930 (昭和5)	1538	1105
1915	46	7	1931	1998	1022
1916	115	30	1932	2695	1078
1917	385	58	1933	3182	1209
1918	806	51	1934	3391	1321
1919	660	97	1935 (昭和10)	3867	1516
1920	717	239	1936	3727	1505
1921 (大正10)	471	192	1937	4902	1601
1922			1938	4029	2333
1923			1939	4523	2403
1924	255	170	1940 (昭和15)	7146	2678
1925		294	1941	10316	3055
1926	490	274	1942	9803	3744
1927 (昭和2)	985	199	1944	19118	7122
1928	1442	479			

(注) 内務省警保局各年12月末の『内地在留朝鮮人職業別調』人員数による。
ただし、1919年と1921年は『国勢調査報告』、44年は『朝鮮人帰鮮希望者見込数』による。
「朝鮮人強制連行調査の記録 中国編」より

I 明治～1930年代

鉄道建設工事の朝鮮人

明治末期から、日本国内の鉄道建設工事に朝鮮人が就労していましたが、島根県下で在住朝鮮人が増加し始める大正期の主要な就労現場は山陰線鉄道工事でした。

表2が示すように、鹿足郡から美濃郡にかけて居住者が多い時期には山口線の工事が行われていました。三江線工事の時期には邑智郡で、木次線工事では仁多郡で居住者が急増しています。島根は山間地が多く、トンネル工事も多いことから、難工事で死傷者も多かったのではないかと思います。

表2 島根県市郡別在住朝鮮人の推移

	1917 T.6	1918	1919	1920	1921	1922	1923	1924	1925	1926 S.1	1927	1930 S.5	1934 S.9
松江市	—	1	2	1	1	2	2	2	3	4	4	38	87
八束郡	3	—	—	—	—	1	2	4	6	36	57	55	62
能義郡	1	2	1	2	—	—	1	4	9	12	26	26	82
仁多郡	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	26	447
大原郡	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	42	23
飯石郡	—	—	—	—	8	—	7	2	16	—	26	93	280
簸川郡	3	2	3	4	3	4	14	4	19	—	18	38	105
安濃郡	4	—	1	12	—	3	5	9	23	19	25	60	91
邇摩郡	5	2	4	3	6	6	7	3	7	61	14	47	111
邑智郡	22	20	7	1	3	3	6	31	34	—	16	132	420
那賀郡	12	25	29	197	95	32	19	46	69	—	142	247	469
美濃郡	—	1	66	125	135	260	10	22	131	113	190	257	485
鹿足郡	278	398	282	171	123	2	1	79	23	46	79	217	563
隠岐島	2	5	3	7	3	4	8	6	6	7	30	30	64
県計	330	457	398	524	431	316	78	214	346	207	604	1308	3289

(備考) 各年『島根県統計書』より作成、各年とも12月31日現在の居住者

「朝鮮人強制連行調査の記録 中国編」より

II 戦時体制下の強制連行

【島根の強制連行】

集団募集

表3は、40（S15）年～41（S16）年までの2年間の集団募集による朝鮮人労働者の事業所別移入の状況について、42（S17）年6月末現在でまとめたものです。

表3 集団募集による朝鮮人

		1939年 14年度 承認	1940年 15年度 承認	1941年 16年度 承認	計	1941年 6月末 雇入総数	同左 現在数
島 根 県	鱒淵鉱業所(昭和鉱業)		30		30	30	4
	新北発電所(飛鳥組)		120		120	166	69
	新北発電所(森本千吉)		100	100	200	217	143
	澄川発電所(森本千吉)		350	150	500	324	141

(注) 中央協和会「移入朝鮮人労務状況調」(『近代民衆の記録』10,414頁)
「朝鮮人強制連行調査の記録 中国編」より

鱒淵鉱業所は当時の簸川郡鱒淵村、新北原発電所は今の雲南市、当時は仁多郡三沢村で中国配電株式会社新北原発電所建設工事、澄川発電所は美濃郡匹見下村の日本発送電株式会社の発電所工事です。

鱒淵鉱業所は、40（S15）年2月の日本鉱山協会「半島人労務者ニ関スル調査報告」には

「労務者八名、家族二十一名」と記載されていますが、それが一年半後の41年6月末には4人だけになっています。

新北原発電所建設工事には、飛島組と森本組が集団募集の申請を出しています。飛島組は40年に120人が承認されていますが、雇入総数は166人。森本組は40年に100人、41年にも100人の承認で、雇入総数は217人ですが、現在数は143人と減少しています。また、中央協和会の42年の資料によると、「中国配電新北原発電所工事には、318人が就労していた」とあります。

澄川発電所工事は計500人が承認されていますが、雇入総数は324人で、現在数は半数以下の141人となっています。

後に掲載する証言にあるように、新北原発電所建設工事は24時間の突貫工事でした。隧道工事は一日中、土中の中のトンネル掘りで、十分な食料も衣服も支給されませんでした。厳しい監視下にあったにも関わらず、逃走が相ついだことは、耐えがたい労働現場であったことが容易に推測できます。隧道は山の腹部であったり、水田の下であったりですが、地表に出ている部分を見るだけでも、当時は大変な難工事であったことが容易に想像できます。

《日本発送電株式会社》

戦争遂行のために、政府は電力事業を統合して国家管理下におくことを決定します。1939年4月1日、日本発送電株式会社として巨大国策会社が創立されました。

《中国配電株式会社》

電力事業の統合に続いて、政府は配電事業の統合整備に乗り出します。中国地方を管轄区域とする中国配電株式会社は、1941年9月に設立されました。

官斡旋

表4にある強制連行された労働者がどこへ配置されたのかはわかりませんが、逃走者は一段と増加しています。後述の石田さんの証言にも、逃走者を手助けした祖父の話が出てきます。

表4 移入者現在調(官斡旋によるもの)

	府県別	斡旋承認数	移入者数	他府県よりの 転入者	同 左 減 耗 数					現在員数
					逃亡者		不良送還	その他	計	
					所在不明者	発見送還者				
昭和18年1月	島根	200	196	—	88	—	—	1	89	107(1)
昭和18年9月	島根	300	290	—	160	—	—	3	163	127(1)
昭和19年2月	島根	300	290	12	185	—	—	48	233	69

(注)各月『特高月報』による

(「日本海地域の在日朝鮮人—在日朝鮮人の地域研究—」内藤正中著より)

***徴用** 徴用令状（青紙）による強制連行

表5は、42年10月の国民徴用令に対して、山陰両県在住の朝鮮人がどのように対応したかがわかる資料ですが、両県とも約半数が出頭していません。

表5 在日朝鮮人の国民徴用結果表(昭和17年10月)

	府県別	出頭命令ヲ受ケタルモノ	不出頭者	出頭者	徴用令状ノ授ケタル書	備考
昭和17年10月	鳥取	150	71	79	30	徴用令受領所在不明者3
	島根	298	132	162	91	
	全国	17,188	7,372	9,816	4,239	

(注)昭和17年11月『特高月報』(内務省警保局)

「朝鮮人強制連行調査の記録 中国編」より

朝鮮からの「徴用」でわかっているものは、1944年12月16日から美濃郡都茂村の都茂鉱山に176人が強制連行されたこと。また、同年12月と45年3月に安来市の日立工場に150人の「半島訓練工」が連行されてきたことがわかっています。

表1の1939年以降を見ればわかるように、強制連行期に入ると在住朝鮮人数が飛躍的に増加していることから、実際には上述した資料以上に多くの労働者が連行されてきたと考えられます。それはまた、現在判明している以上の犠牲者（死者、負傷者）がいたことを意味しています。当時の工事に関わった日発、中国配電、森本組、飛島組など工事関係業者には、ぜひ眠っている資料を出していただきたい。

*** その他**

強制連行と確認されてはいませんが、戦時体制の時期に、山間地である島根県には、製炭業、松根油（注 参照）の製造、また農業報国隊として多数の朝鮮人労働者が就労していたことがわかっています。

1930年（S5）の島根県在住朝鮮人の職業調査によれば、土木建築業の中の土工314人に対して炭焼夫320人と多く、山間部にも鉄道が開通したことにより製炭業が発展し、炭焼きに従事する労働者が増加したと思われます。

戦時体制下に入り、燃料の需要が逼迫してくると、島根県は1944年に告示を出して「製炭労働者ノ県外移入又ハ半島労務者ノ内地移入」に対して県費から補助金を出すことを決定しています。その成果は確認されていませんが、島根県では引き続いて戦後しばらくの間まで多数の朝鮮人が製炭業に従事していたと思われる。

農業報国隊とは、農繁期に農作業の援助をするために組織されたものです。1941年6月に、「三班65人の朝鮮人農業報国隊島根分隊が送り込まれ、八束郡岩坂村、大原郡加茂町、美

濃郡豊田村の三町村に分かれ、戦没応召農家に泊まって奉仕作業をした。」（『日本海地域の在日朝鮮人』内藤正中著）

さらに1943年の秋にも、島根、鳥取両県に各83名ずつの「朝鮮農業報国青年隊」が送り込まれ、農繁期の1ヶ月間、島根県では能義郡能義村や大原郡潮村などで農作業に従事しました。

《松根油（しょうこんゆ）》

松の伐根（切り株）を乾留してえられる油のことで、テレピン油ともいいます。松の木からとられる樹液や樹脂（松やに）とは異なります。

戦争末期、日本では南方からの原油の輸送が困難となり極度の燃料不足から、軍は松根油を航空燃料に使うことを決定しました。原料の松の伐採に多大な労力が必要とされるため、多数の朝鮮人労働者が動員されたと思われます。しかし、実際に航空燃料として使用するには問題があったようであり、実際に使用されたという記録もないようです。

山林の多い島根県では、松の木の伐採と松根油製造のために、各地で朝鮮人労働者が従事していたと思われます。

米子市立山陰歴史館には、戦後も保管されていた松根油が収蔵されています。



3. 戦前の雲南地方の近代化と朝鮮人

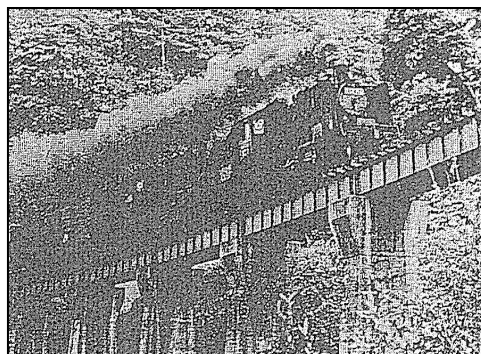
1. 雲南地方の近代化の象徴 木次線の建設

雲南地方における近代化は明治以降、日本が日清、日露など対外戦争へ踏み出していく富国強兵国家体制形成への全国的軍事物流網である鉄道建設、木次線の建設に始まった。

木次線の建設は、1914年(大正3)の軽便鉄道建設の認可を得た簸上鉄道株式会社の設立に始まった。1915年に着工、1916年に宍道～木次間が開通し、営業を開始した。この鉄道の開通により、雲南地方奥地の木炭、米、砂鉄、木材、牛馬などが木次駅や大東駅に送られた。しかし、仁多郡の製炭業者らには木次駅への物資輸送の問題として簸上鉄道延長が課題であった。このため、1917年に斐上鉄道と芸備鉄道の連絡鉄道の新設を帝国議会に請願を行い、1919年(大正8)にこの請願が採択された。

2. 木次線の全線開通と韓国朝鮮人労働者の犠牲

1922年(大正12)5月、広島県への鉄道延長工事起工式が三成で行われたが、同年9月の関東大震災で工事は一時延期された。その後、1927年(昭和2)に木次～三成間の第1期工事に着工した。この区間では特に、下久野トンネルは地盤が硬い難所であり、鉄道省直轄工事として推進され、朝鮮半島出身の労働者多数が配置された。しかし、この工事では事故が多発し、多くの死傷者を出した。このトンネルの完成に5年の歳月を要し、1932年(昭和7)12月に木次～三成間が開通。1934年に三成～八川、1937年(昭和12)に八川～備後落合間が開通し、ここに芸備線と連絡し木次線全線が開通した。その後、宍道～木次間は簸上鉄道。木次以南は国鉄という私鉄と国鉄が連絡運輸を行っていた木次線は1934年(昭和9)に政府が簸上鉄道を買収し、全線が国鉄経営となった。



開通当時の木次線

3. 雲南地方の近代化、開発工事に従事した朝鮮半島の人々・・・

木次線の全線開通に11年を要したが、トンネルなどの難工事で30人以上の貴い人命が犠牲となった。その多くはトンネルなどの現場に配置された多くの韓国朝鮮人であった。下表は木次線建設を支えた朝鮮半島出身の従事者数であるが、犠牲となった者も多かった。

西暦	1930年	1931	1932	1933	1934
昭和	5年	6	7	8	9
人数	29人	134	160	235	447

急増していく韓国朝鮮人ですが、これは建設工事の進展が背景にあると考えられます。このように1930年代から多数の朝鮮半島出身者が木次線の工事などに従事していたが、1932年に始まる日中戦争の長期化により若者が次々と戦地に投入された1930年代後半

から戦争経済体制への電力確保、雲南地方の斐伊川流域では大規模なダムや水路、発電所など電源開発工事が開始された。この工事には出征した日本人の代替労働力として24時間の突貫工事による電源開発工事に韓国朝鮮人が投入され、危険な工事現場で酷使され、多くの犠牲者を出した。そして、日本がアジア大平洋へと戦争を拡大して行く中で、雲南地方各地では木材伐採や航空機燃料とする松根油採取、農業などで多数の韓国人の働く姿が見られた。終戦後も、一定数の韓国朝鮮人が引続き雲南地方で生活していた。

昭和初期、1930年代からの雲南地方における近代化—地域開発事業や産業振興—は、地域史の裏面に数多くの朝鮮半島出身者の大きな貢献と尊い犠牲があったことを忘れてはいけません。

その多くの事実・実態を把握することが今やできないとしても……。

雲南地方における建設工事による犠牲者の一事例

本名	日本名	本籍・住所	生年月日	運行年月日 収容先	企業・事業名	都道府 県名	死亡 年月日	死亡 年齢	死因
	平沼 炳成	慶北 青松 青松 同幕365			森本組温村作業所	島根	1941.9	26	労災
徐 乙祚		慶南 晋陽 金谷 検岩			森本組温村作業所	島根	1942.4	24	労災
	金光 ●元				森本組温村作業所	島根	1941.4	23	労災

出典文献

大日本産業報告会『殉職産業人名簿』朝鮮人強制連行真相調査団蔵



阿井川ダム

朝鮮半島出身者の労働 証言交え歴史調査

雲南、奥出雲

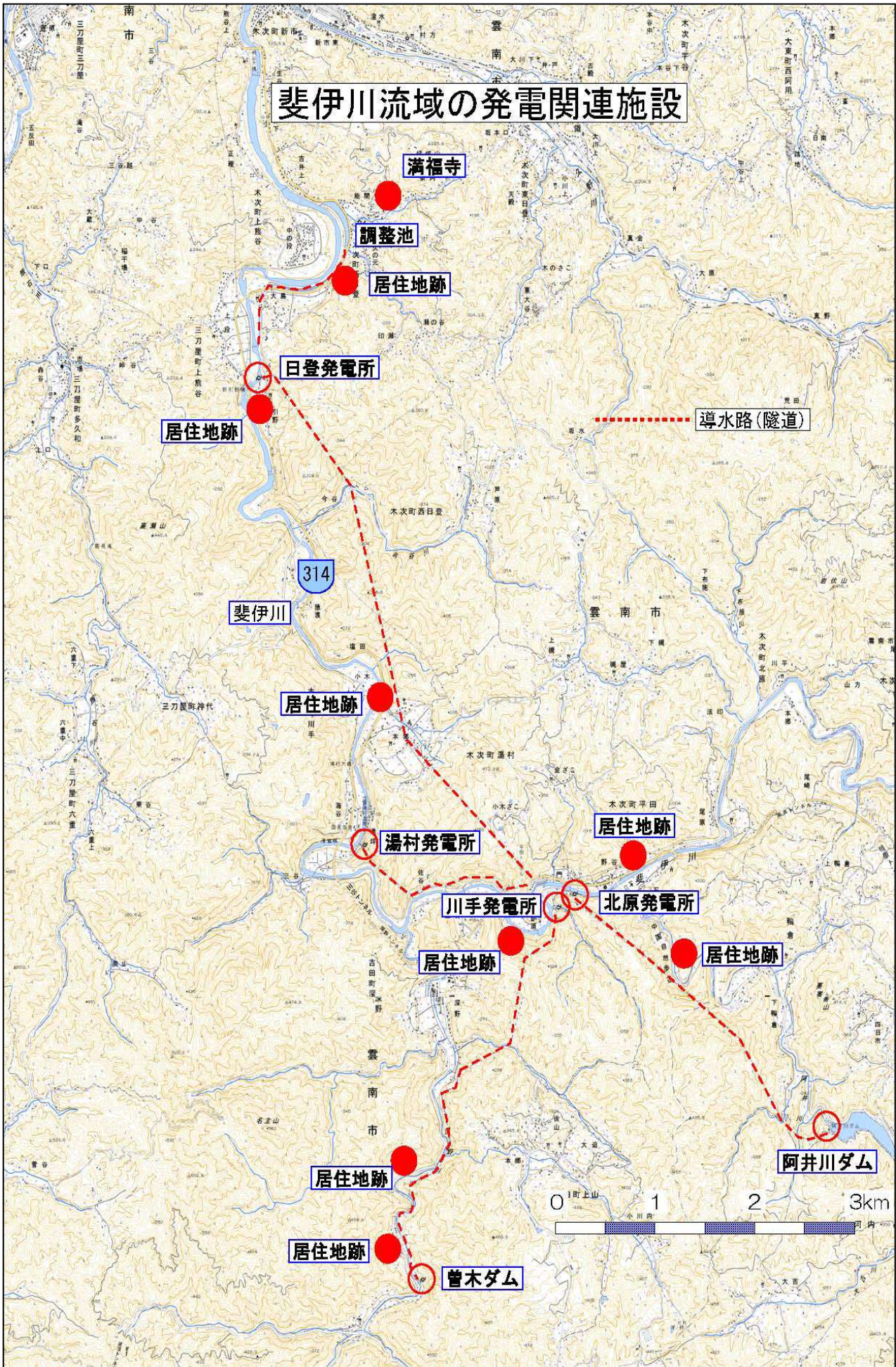
一九三〇―四〇年代とで組織する「日韓市民友好と地域の国際化を考えたい」として、好と地域の国際化を考えたいと組織する「朝鮮半島出身者若者会」(江角秀人代表)が主催。会員や技術者でセッケンを呼び寄せていた。広島市重帯工場へ送電するため、突貫工事を進めた。参加者は、一九四二年に完成した雲南市水次町湯村と西日登は、下流のダムへ送る送水路を見学。川床や水田下にも見かれて、二月、発電所建設工事で「好いつなげたい」と話し、研究を進め、日韓友好の歴史を語り、

西日登の満福寺では、半島出身者で九四四年、研究を進め、日韓友好の歴史を語り、

発電所建設工事で亡くなったと伝えられる朝鮮半島出身の女性の墓を見学する参加者

2006年7月3日 山陰中央新報

2006年7月31日 山陰中央新報



4. 証 言

斐伊川流域における発電所建設工事と韓国朝鮮人

現在、斐伊川流域において中国電力に属する4基の発電所が存在しています。4基の内3基は、出雲電気株式会社や日本発送電株式会社が太平洋戦争前の1939年(昭和15)から1944年(昭和19)にかけて建設に着工したものです。

斐伊川流域に設置している水力発電所施設

発電施設名	所在	運転開始	出力(kW)
湯村(ゆむら)発電所	木次町湯村	1919(T 8). 11	1,000
北原(きたはら)発電所	木次町平田	1942(S17). 11	15,600
日登(ひのぼり)調整池	木次町西日登	1942(S17). 11	—
川手(かわて)発電所	吉田町川手	1944(S19). 12	900
日登(ひのぼり)発電所	木次町引野	1951(S26). 11	8,510

【湯村発電所】雲南市木次町湯村 1919年(大正8年)完成

【北原発電所】雲南市木次町平田 1939年(昭和14)に着工し、1942年11月に竣工、運転が開始された当時、山陰地方最大規模で、かつ近代的な発電所として注目された。

【調整池】雲南市木次町西日登 北原発電所と同時期に建設された。昼間に発電を増やし、夜発電を減らす運転をするので、下流の河川水位の変動を調整するために築造された。総貯水量9万m³。

【川手発電所】雲南市吉田町川手 北原発電所に近接し、1944年(昭和19)12月に旧北原発電所の水車や発電機などの機器を移転し、斐伊川の支流、深野川の流水を利用して運転を開始した小型発電所である。

【日登発電所】雲南市木次町引野 1944年(昭和19)に建設に着工したが、戦時中の資材不足のため全行程の27%まで進捗した1945年10月、政府から工事中止命令を受け一時、工事を中断した。その後、1951年(昭和25)2月に工事を再開し、所属も中国電力が引継ぎ、1951年11月に完成し、起工後7年ぶりに発電を開始しました。この日登発電所は北原発電所と共に、電力供給において特に重要な役割を果たして来た。

斐伊川流域の発電所群、特に戦時中を中心とする建設工事には、延べ45万人の労働力とおびただしい機械力や資材が動員・投入され、使用されたセメント量は15万袋であり、中国五県最大規模の電源施設の建設工事と言われ、電力は山陰・山陽の両方面に送電されている。こうした巨大な施設を長期間にわたり山間地における困難な建設工事に動員された多数の韓国朝鮮人の労働や生活の実態について、これまでいただいた証言や当時の資料により、その有り様の一部ではあるが、再現していきたい。

北原発電所の建設工事の実態や朝鮮人の様子

証言者：藤原行夫さん（仁多郡奥出雲町在住）

2001年3月31日

於 木次町 北原発電所付近にて

北原発電所の工事が始まったのは、昭和10年位からじゃないかと思いますね。

ぼくは昭和13年3月の高等小学校卒業ですが、その工事にかかるため3300ボルトの高圧線を引いてました。北原発電所から6キロ以上の阿井川の河内にダムができたんです。そこまでの間に隧道ができました。そして、隧道掘削の入口を途中の3カ所に坑道を出したんです。昭和13年位から工事の下準備ですね、山の上に電柱を建てて、そこから電気を引く工事を始めました。工事がいつから始まったかは記憶がありません。卒業して15～16歳の時に集落の人を雇ったんです。それで結局、14年の末頃からそういう配線ができ、3300ボルトの高圧線が入る。それから坑道入口に50馬力位のコンプレッサーを取り付け、坑道を作る準備をしました。ぼくが坑道に入ったのは、14年の秋口です。



藤原さん

昭和16年4月まで、その仕事に従事しました。16年4月に国民徴用令が発動になり、第一次の徴用、いわゆる白紙（しろがみ）です。それで呉の海軍工廠へ行きました。その後、どういうふうに工事が進捗したのか、この発電所がいつ頃、完成したのかぼくには定かではない。ここの70歳より上の方でないと、その当時のことを知っておられる人はいないと思います。ぼくが知ってるのは14年秋口から16年4月までで、ここから4キロ上がった所、ダムから行ったら第2の坑道で働いていました。飯場や事務所跡もありました。この北原発電所は森本組がやっていました。今は建物なんかありません。バラックもバラック、お粗末な所で生活していましたねえ。

昭和15年中頃から、朝鮮の若い人を雇ったんじゃないでしょうか。

ぼくがいたのは森本組の下請けの中野組です。最初、掘るのが導坑というので、その次に第一といってその上を掘ります。そして今度は側壁を掘って行って第一側壁、中割側壁、そして丸形、そういうふうに掘っていきます。ちょうどぼくが帳付けしていた頃、うちの組は60人くらいじゃなかったかと思います。その中に現場監督がおり、昼夜交代の突貫工事でした。今頃と違ってあの頃はすべてが人力でした。坑道を掘るのは十一型と言いましてスタンドを横に立て、削岩機を2台入れて掘ります。一番上から下まで16本掘り、片っぽ8本。発破をかける。昼掘れば、夜に発破をかけ、ずり出しをするんです。夜に掘ったら昼出し。だから、朝鮮からたくさん若い人が来ていたのは技術的というよりも、いわゆるトロッコ、ずりを出す。そういう仕事をしていた。みんな15～16歳の今でいえば子どもでした。あの頃は一人前でしたが・・・。

写真の15～16歳の少年は、昭和15年位になってから来たんじゃないかと思います。最初、ぼくが入ったのは坑道の中で坑夫さんの手伝いをするぐらいで、一人前の抗夫じゃないですね。半年位して帳付けといって帳場に入りました。だから、15年中頃から、朝鮮の若い人を雇ったんじゃないでしょうか。それまでは一般の人が同じ作業をした。トロッコ押しとか。その頃内地の人で、そういう現場で働く人は限られた人じゃないでしょうか。半島の人が多かったんです。うち現場でも、監督さん（ゆびさしさん＝現場の指図をする人）だけが内地の人で、あとはほとんどが今でいえば朝鮮人ですね。

先に来られた先輩は家族同伴の方もおられ、働く人は全部が妻帯者ではありませんでした。よくわかりませんが。後から来た20～30人位は、それはみんな若い子ですよ。今でいえば、中学生くらいでしょうかね。

05.jpg



北原発電所建設現場で写した朝鮮人青年ら？

1941(昭和16)年1月

否応なしですよ。言えば、強制連行と一緒にことですよ。

強制的に連れてこられたというのは、現在時点で、そういわれていると思うんです。ぼくらが働いているときは、強制的に連れてきたというのではなくて、国内におる我々でも行きたくなくて、例えば各町村で今度10人ほど徴用がいるんだ、ということであれば、ぼく百姓家の次男ですからね。終戦後、そういう問題が出たんです。役場に兵事係という係があり、そこに全部登録してあるんです。ここには長男がなんぼ、ここには次男がなんぼって。そうしたら、一番最初に徴用がかかるのは百姓家の次男以下、年齢が15歳から17歳でしょ。あれは該当じゃないか、ってことになる。いくらどんなところに勤めていようとも、否応なしですよ。言えば、強制連行と一緒にことですよ。

ぼくがいた船戸組（一次下請？）には朝鮮の人が30人位いました。ゼッケンつけていましたから。名前をいちいち言う訳にいかないので、現場に入る時は発破服の上の前後に1番とか。1番と5番はどの坑道に入った、ということぼくは帳面に付ける。そういうシステム。どういう事情であの人たちがこの現場に来たのか定かではない。何も言えません。その頃は、日本でさえもちょっとしたことを言えば引っ張られるような時代でしたからね。

隧道なんて直線です。本抗に最初、縦抗を入れる。100メートルか150メートル行って、本抗に入る。ぼくが働いていた所も本抗まで100メートル位ありました。

導抗はぼくの背よりちょっと高い位。その穴を最初に掘っていく。そしてスタンドを横にし削岩機を2台つけ半分ずつ、8本ずつ16本掘っていくんです。50馬力のコンプレッサーを各坑道につけ、朝早くからそれを回し空気を作る。空気と水を一緒に送ります。隧道の重要な仕事は空気。導抗を掘るには水がいます。約1メートル50センチ位、掘る。くり粉という、それを吹き付けた水で出す。それから一番上、天場に最初ダイナマイトに火つける。これには順序があり、14～15メートル逃げたら、少々遠くへ飛んでも石は当たらない。だから数える、14～15メートルを飛んで逃げる。

Q（事故も多かった？）

いや事故よりもね、ダイナマイトの不発があったね、それをトロッコに積んで出す。信管が爆発したらいけませんからね。だから不発が何発出たっていうことをすぐ次の工程に教えるんです。ゆっくり出していくと。抗夫はわかってましたよ。だいたい、どこが不発かってこと。最初、ダイナマイトに穴を開け、導火線1メートルなら1メートル切って、それに雷管を入れとめる。それをダイナマイトの中に差し込み、そういうのが16本。導火線の先に、何本か線のつかないダイナマイトをおく。う～ん、事故はなかったですね。仮にあったとすれば、医者もいませんしね。大変ですよ。



06.jpg

北原発電所

Q（発破作業をする人は日本人でしたか？）

いや、やっぱり朝鮮の人でしたよ。抗夫の人です。それは自分が掘った穴ですからね。自分がつけないといけません。掘った人が発破かけるんです。

Q（1日に、どれくらい進みましたか？）

まあ岩盤によってねえ・・・。8時に始まれば午後5時半位に一人でカンテラもって坑道に入っていくんです。測量する人が必ず1週間に1回来ます。坑木に釘を打ってセンターを出しておく。それで3本位、センターをカンテラの火で天場に出しておく。そうすると大体、

1日に1メートル50センチ位掘るんですが、それだけではいっぺんには崩れません。1工程で1メートル20～30センチ位なもんかなあ。

その頃は機械といっても、ここら田舎では大変な機械だと思いました。それから鍛冶屋さんがいろんなノミの先を作らんといけません。機械で圧縮してノミを作る。金型があり、トントンと金上げをする。野鍛冶さんでも上手な人がやらないとすぐ折れましたからね。

Q（暮しはいっしょでしたか？）

いっしょ。飯場でも、ゆびさしさんとか監督さんだとか、日本人はちょっとよくて家族もいっしょにおられた。船戸さんにも子どもがいましたがねえ。

（ということは何人かは家族ぐるみでおられたんですね？）

監督さんは家族同伴でした。

（朝鮮の方は？）

飯場は組が管理していました。だから食事は森本組が食料だとかは供給してました。

Q（賃金はどうでしたか？）

そりゃあわかりませんわ。抗夫さんは高い。韓国人はどれくらい払っておられたか、ぼくは帳簿付けていても数字ほど出すんです。それになんぼかけるかっていうのは組幹部の人が決める。ぼくらはかかった日数だとか人数を計算して出すだけでしたからね。朝鮮から若い人がこういう所へ来て働いて、どのくらいの待遇を受けられたか、まあ、戦時中のことですしねえ・・・。当時はそんなこと思ってません。とにかく働くことしか。



今も残る導水路

Q（現場や飯場で日本人と朝鮮人は、けっこう仲良く？）

ええ仲良く。そうせにゃあ仕事ができませぬわ、危なくて。（けんかも）ない、ない。（いっしょなんですか？）いっしょ、いっしょ。飯場もいっしょです。ただ監督さんらが別の棟におられるぐらい。あとはみんないっしょですわ。賄い婦さんも。食事もいっしょ。まあ、食事っていったって、かねのどんぶりだね。朝鮮の人は汁かけです。ご飯にキムチ、真っ赤なのを入れて、みそ汁でツァーっと。女の人もいっしょでした。それからメンタイっていう干し魚。あれを石の上でたたいてたくさん食べました。あれなんか俵に何杯も来よった。ああいうのでカルシウムを摂るんでしょうなあ。日本人は煮て食べましたね。

（食料はどこから？）それは組が買ってきて。食料だけはね、腹の細い思いはしちよらんと思いますよ、食糧難でもね。腹が減ったら仕事になりませんから。

（ご飯を作るのは朝鮮人ですか？）朝鮮のおばさんが来ていました。先に来てずっと、中野組で働いている人は、中野組が前の工事現場からここに連れてきた人です。

Q (休みなんか、たまに?) ないです。そりゃあ休みなんかはない。今頃の土、日みたいな自由はききやしません。(言葉は?) そりゃあ片言でも日本語を言いましたよ。監督さんは朝鮮語を話します。詳しいことを言わんといけんから。抗夫さんなんかはもうほとんど日本語ができましたよ。なんぼ掘ってくださいと言うと、それにすぐ返答ができるぐらいね。

(日本語教育を受けているから?) その時は日韓併合してからさうとう経ってましたからね、こちらへ来て仕事される方はほとんど日本語ができました。

(名前は?) 若い人は番号でしたけどね、“先に来られた人は、金だとか名前がありました。日本名がだいぶんありましたわ。例えば、ここらだったら「鴨倉」という土地だから「かも」とかかって自分の姓にしておられる人がありましたね。どのくらいおられたかなあ。

(飯場跡にて)

飯場はこの杉山の中にありました。こんな木はあの頃には全部建築材で出してます。道路は昔のまま。路上に家を建ててましたね。自転車で森本組の事務所に行って、ダイナマイトをもらって積んで帰りつた。

Q (ダイナマイトを自転車に載せて?) そうそう。

(中野組現場跡)

この谷を全部埋めてました。この山上に10何メートルの電柱をかついで上がった。それで3300ボルトの高圧線を通したんです。あの梅の木がある所が中野組の事務所でした。ここら辺はずっと飯場だったんです。昔のことですから測量なんかしません。ゆき指しというのは大工さんですから、鋸とチョウナしか持ってませんでした。全部それで削って合わせ(冬が大変ですね、雪が多くて)冬なんか、そのままですわね。朝鮮の人は食べ物がね、我々と違って脂肪分が多い、カロリーの高いものを食べますからね。

(強制連行について)

差別はあったかもわからんけど、戦争をやり遂げるためでしたからね。強制連行だとか、ああいうことは全然思っていませんでした。朝鮮人の人もね。差別なんか考えたこともない。戦争をやり遂げないといけないということで、われわれ15や16の者でも一生懸命働いたんですからね。おそらくここへ来た朝鮮の若い人も、心の中にはなんかあったかもわからんけど、現実としては、そんなこと思ってなかったと思いますよ。

全然、反抗なんてことしてませんもん。おとなしく一生懸命仕事してましたけんね。だから、あんまりその当時の人を責めたくないなと思います。

斐伊川への調整池近くの朝鮮人集落の暮らし

証言者：徐珍相さん（75歳）（出雲市在住）

2006年7月31日

於 日登調整池付近にて

森本組というのがあって、強制連行された人達がたくさん来るので、父に責任を持って来てくれということで、父に連れられて私と妹、弟、母の5人でここにやって来た。

来てみたらこのあたりが全部バラックで100人以上住んでいた。私はその西日登の小学校に行っていた。住んでいる人はほとんど朝鮮人だった。映画で見たりするように、朝鮮の人を叩いたりということはなかった。お酒を飲んで喧嘩ということはあったが。喧嘩になると父がバケツに水を汲んできてバーとかけて喧嘩がおさまった。

《日登調整池の近くで》

この調整池は浅いけど、当時もっと深くて、ざるに掘ったのをに入れて、よいしょと担いであがる。垂木を縄で組んではしごのようにして上がって来る。大変な重労働だった。はだしで現場に行っていた。深く掘るほど賃金がいいと、朝から晩まで働いていた。

あの辺りは所帯を持った人達の集落があった。私の記憶では日本人は少なくて、朝鮮人が多かった。小学校3年生の時、京都からこちらへ来て1年もいなかったが、次に平田へ行った。ここが終わったので、一畑電鉄とか宍道湖護岸工事があるのでそちらへ行った。

尋常高等小学校1年の時、敗戦になった。6年の頃から授業はなくて、遺族の家などに行って手伝いをした。この小学校（日登）でいじめられた記憶はない。敗戦前に平田のほうの小学校に移ったが、そこでのいじめは今のいじめの比ではなかった。何度も死にたいと思った。キムチを入れて行っている訳でもないのに、「くさい」「朝鮮人」と言われた。生徒数が多かったが、朝鮮人は私ら数人。父から、日本人に負けるな、ちゃんと勉強してちゃんと働けばよいと言われ、一生懸命勉強したが、当時のことは話したくない。うちの子供に話しても信じられない、と言うほどだ。

そんなんでしたが、私は京都で生まれて日本も好きだったし・・・

一番近いところの歴史にふたをして隠して学校で教えない。私は証言を頼まれたらイヤと言えないから出るんだけど、何十年こういう話をしている。日本の学校は近代史をとばして教えないから。

あの頃の苦しさ—— 60年前（100年前のことじゃないのに）のことなのに。長靴の配給が学校のークラスに1足しかなかった。雪が多いのに、足袋の配給があっても履いて行



徐さん

けない、ぬれるから。学校へ行って足を拭いてからはいた。家に帰ったら、足が痛いやらかゆいやら。その連続だった。それと民族差別。今の民族差別どころじゃない。今の差別に比べればもっとひどい差別だった。

いまだに朝鮮人差別がある。私たちは税金を払い、法律に従っているのに、いまだに差別がある。こうした証言をすることにより、民族差別がなくなりアジアの平和友好につながっていくよう願う。

Q (ここでの暮らしは?)

ここの学校での差別はなかった。日本人が配給を受けて、それを父が受けて皆に渡していたが、それほどひどい思いはしなかった。キムチはおばさんたちが一年中作っていた。キムチがないとこの人達は死ぬからね。

Q (とうがらしはあった?)

ここの畑でとうがらしは作っていた。にんにくもゴマも作っていた。豚足をどこから手に入れたのか子供だったからわからないが、たれをつけて焼いて食べさせてあげたのを覚えている。

食料を手に入れるルートを父が持っていたが、麦飯とか大根飯を食べた記憶はない。いつも白米。配給もさとう、お菓子とか、20年まであった。だから食べ物に不自由はしていなかった。漬物はこの部落で共同でしていた。豚足がくれば皆で分けた。



09.jpg

日登調整池

Q (単身の人もいた?)

ほとんど朝鮮人は単身でしたよ。

日登発電所の建設で働く朝鮮人との交流

証言者：飯塚真三さん（74歳）（雲南市木次町在住）

2006年9月 17日
於 日登発電所付近にて

木次小学校に行っている頃、お父さんは飴や雑貨を扱う店を経営しており、定期的に朝鮮人集落へ野菜の配達をしていた。

昭和19年頃、父親に言われ、小学生の時、自転車には大根、上は白菜を積んで、朝鮮人集落へ行った。行くと、小学生なのに「あんちゃん、来い」と、どぶろくをすすめられた。食べているものを見て、朝鮮人の人達はこんな辛いものを食べるのかと思った。

その集落には朝鮮人の人達が3～40人いたと思う。平屋の細長い建物2棟で、木次の店に来た人は日本語を話していた。

配達途中、下り坂で突然「発破をかけるから止まれ！」と言われた。自転車を止めるとどこかでボンと発破の音がした。

竹かごに野菜をいっぱい入れて、日曜日でも仕事で休みはなかった。

話はちがうが、日登トンネル（鉄道の木次線）は、もっと前の昭和10年位か、朝鮮人が工事していた。難工事だったようだ。

そこに大きな飯場があったと聞いている。昭和の初め頃は大人数でした。長いトンネルの工事で開通が昭和12年位だったと思う。

朝鮮人集落の人達は、我々と比べると服装も汚いし、（配達から）子供だから早く帰りがかった。朝鮮人の多くは若い人で監督さんが40歳くらいだった。日本は悪いことをしたもんだ。

米は、私は持って行ってないが、たぶん父親が持って行ったと思う。下手な日本語で話しかけられたりした。朝鮮の人たちはいい人達ですよ。戦争中ずっと二人が父親の店に来ていた。40代の監督さんが、お店で一杯飲みながら父と親しそうに話をしていて、ホントにいい人だった。

Q（当時は、お米より芋とかが主食になっていましたよね？）

そうそう。お店には野菜、雑貨、米は闇米。田舎なので、終戦までけっこう豊富に野菜などがあって、朝鮮人に運ぶことができた。

Q（お父さんも自転車で？）

そう。ネコ車とか。大八車もなかった。うちには自転車が2台あって、当時としては珍しかった。



飯塚さん

Q (飯場は日登発電所の近くか?)

そう、その草むらの。

徐さんのいた飯場とはちがうから、あちこち分かれていたんだらう。

(Q) ここは建設途中で敗戦になったんですね。

そう。

(Q) ここの人達はどんな仕事をしていたのか?

水路とか隧道とか、危険な仕事ばかりさせられていた。

2006年9月18日 日 雲南

第3種郵便物認可



韓国・朝鮮人労働者の集落があったという日登発電所付近を見て回る日韓市民友好と地域の国際化を考える会の人たち＝雲南市木次町で

写真もとに当時聴く

雲南

太平洋戦争前から戦後にかけて雲南地域の土木工事で働いた韓国・朝鮮人の歴史を調査している市民グループ「日韓市民友好と地域の国際化を考える会」は17日、雲南市内で現場などを回るフィールドワークを実施した。41年に撮影された韓国・朝鮮人集落の写真が新たに見つかり、メンバーが地元の人たちから当時の様子を聴いた。

同会は7月から、雲南地域で韓国・朝鮮人が土木工事に参加した同市木次町の北原発電所や日登発電所、その周辺の集落跡地などで証言を集める作業を進めている。この日は、同会のメンバー5人が、北原発電所の工事中に撮影された写真を持つ吉川昭徳さん(73)から、近くにあった韓国・朝鮮人の集落の様子を聴いた。写真には、工事中だった発電所の川向かいに平屋の建物が写っていた。この建物が韓国・朝鮮人の暮らした場所、当時は夕方になると軍事教練も実施されていたという。吉川さんは「集落には家族連れがたくさん住んでいた」と振り返った。

同会は同町新市の男性(74)からも様子を聴いた。実家が雑貨店を営んでいた男性は44年ごろ、毎週1回、父親の代わりに店から約6キロ先の日登発電所近くの集落まで大根や白菜を運んだ時の様子を証言。男性は「商品を持っていったら、お酒を勧められた」と体験を話した。

同会の江角秀人代表は「10月にもさらに証言を集める会などを開きたい」と話している。

2006年9月18日朝日新聞



11.jpg

日登発電所

北原発電所の建設工事当時の韓国朝鮮人と住民の交流

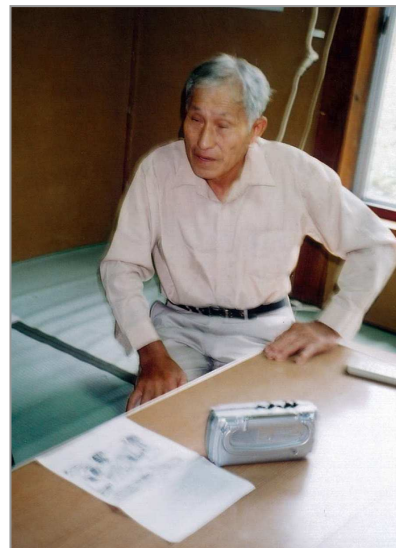
証言者：吉川昭徳さん（雲南市木次町在住）

2006年 9月17日

於 木次町 北原発電所付近にて

重労働で、人格も捨て黙って働くのみ

1939年（昭和14年頃）、近隣の大工さんを集めて作業員の方々が寝泊まりされる建物小屋の建設が始まり、その家屋はバラック作りで簡素の簡素な建物であった。小屋（建物）が出来上がると作業員が連れて来られ、正月を除いて、来る日も来る日も建設作業であったが、地区の方々との大きいトラブルもなく、ごく普通に日々が通り過ぎて行った。しかしそれは、私たち日本人からの言葉であって、そこで働く人たちにとっては、重労働で、人格も捨て、ただ、上司の命令のままに黙って働くのみであったかもしれない。



吉川さん

1941年（昭和16年）7月のこと。

このまっすぐ伸びる樅の木がある辺りで、その労働者の長屋が造られた。丸太を組み合せて、中は寒いので紙が張ってあった。また韓国・朝鮮の方々はオンドル（現在の床暖房のよう）を作って寒さをしのいでおられた。長屋が出来上がると作業員の方々がどこからともなく来られる。日本人（高知県出身）や韓国・朝鮮の方々が……。日本の方はいわゆる出稼ぎとして、トンネル工事に従事されていたそうです。また、高等科、初等科（S16年ごろのこと。）を卒業したようなあどけない少年も連れて来られ作業をしていました。そして発電所建設の一日の作業が終わると、この少年たちが軍事教練している風景を近隣の方々がよく目にされたそうです。

作業には班が編成され、元請けの森本組。以下発電所建設の中川班・片寄班など。その作業の有り様は、森本組の職員は主に計算と技術者でした。その他はトンネル掘りや水路造りで韓国・朝鮮の人達は特に重労働である隧道の中に入り、土を掘り出す作業をさせられていたそうです。所帯持ち、独身あわせて100人以上はおられたでしょう。食べ物は粗末な食品でした。森本組の経営する店（食品屋）で購入し、その代金は給料から差し引かれていたそうです。また、地元の店にも買い物に行かれる姿があつて、地域の方々と交流はないが、差別をするという行為もなく、自然に暮らしが成り立って、日本の住民との共存社会を形成されていた。家族で住んでいた韓国・朝鮮の人達は働くことで精いっぱいでしたが、子供たちを小学校に行かせ、出来る限りの教育を！。と心掛けていたのではないのでしょうか？小学校には在籍名簿もあり、また、この地の方々は、韓国・朝鮮人の子供らが学校で勉学をされた記憶も残っている。

何のために、この地に水力発電所が必要か？住民に問いかけることもなく「官」の力で無理やりにやり遂げたような気がする。

川手発電所の建設工事の居住地での暮らし

証言者：洪 淳大さん（出雲市在住）

2006年10月29日

於 木次町 斐伊川河川敷の居住地跡にて

《斐伊川の住居跡で》

一番上に飯場があつて単身者用、その下に所帯持ち用が1棟2世帯で4棟ほどあつた。所帯用でも、入口を入ると炊事場で部屋は1つ、家具を置いて、五右衛門風呂はあつたけど湯村温泉へよく行った。飯場には、（子供のときからだからよくわからんが）朝鮮人が30人以上いたと思う。

S17年頃から田井の小学校に通っていた。終戦後はここより下がつて農家の養蚕場を借りて住んでいた。ここにいる時も下においてから買い出しに行っていた。闇米を買つて、警察うるさいので、夜中に谷を降りて大阪に売りに行った。米をちゃんと用意して売ってくれる人がいた。米を背負つて木次の駅まで行き、そこでドラム缶に移して夜行列車で大阪へ運ぶと、ある工場のダットサンが待っていた。大阪では3倍くらいの値で売れた。

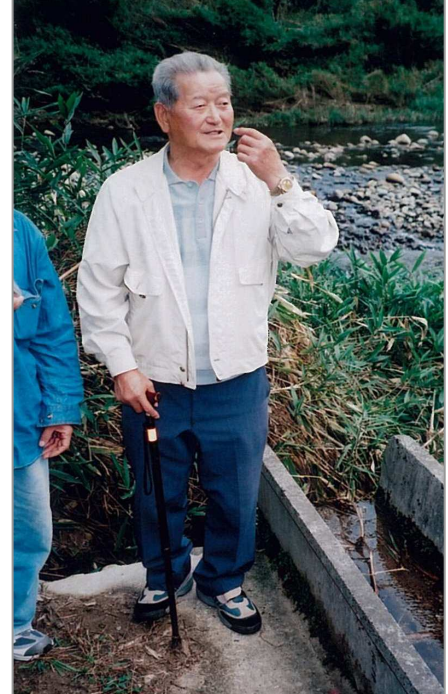
お父さんは、ここから川手発電所までの間の工事に従事していた。斐伊川の堰堤でアユがはねているのを捕らえるのが面白かつた。たくさん取つて帰ると、お父さん達の年配の人達が集まつて、それをとうがらしみそで食べながら、どぶろくを飲んでいた。

Q（日本人との交流は？）

いい人が多かつたね。餡餅をくれたり、焼き米や柿をくれたりした。

Q（お父さんの現場で事故とかは？）

わからんねえ。深谷から曾木（曾木ダム）の方にかけて何百人もおつたから、事故がなかつたということはないと思うけど。飯場の単身者でも40～50代の人が多かつた。川手発電所を起点にして、ずつとずい道工事をしつたから何百人はおつたね。トロッコでずい道の中から出てきては土を谷へ移しよつた。仕事は3交代で昼も夜もなかつた。



洪さん



川手発電所

《ルンペンと王子様》

こちらへは父が先に来ていて、母と私は小学校の3～4年生の頃まで大阪の堺にいた。その頃の生活は本当に貧しかつたね。大根をきざんで米の下に入れて上は米の汁が流れている位のこと。お母さんが配給の砂糖やお菓子を親方の所で米と交換して、それでどぶろくを作

14.jpg

った。どんどんどぶろくを作って多少生活が楽になったが……。といってもよもぎを摘んでお弁当に入れると真っ黒。だからフタで隠して弁当を食べた。よもぎの上に米をのせておいて煮て、その米はお父さんの弁当に、あとはよもぎばかり。それを弁当にしていた。

近くの別荘地から二人、クラスに来ていた。その一人と気が合って、その子は優秀で、服もきれい。家へ連れて行ってくれたが、大きな立派な家で、いつも家の前で逃げていたけれど、とうとう入れられて、その時のことは忘れられない。その子はいつもきちんとした身なりなのに、私はツギハギだらけのルンペンみたいな格好。ルンペンと王子様みたいだった。それなのに、

玄関へ入ると、お母さんが着物で座って「いらっしゃいませ。」と、ルンペンが入ってくるのに、手をついてあいさつしてくれた。冷汗が流れた。応接間にピアノやアコーディオンがあり、お菓子を2個とコーヒーを「どうぞ」と言って出された。コーヒーなんて聞いたこともなかったから、飲み方も、食べ方もわからず、その子がするのを見ながらコーヒーに砂糖、ミルクを入れて飲んだ。苦いのでちびりちびりと。お菓子が口の中で溶けるようなおいしさで、何とか持って帰って兄弟に食べさせたいと思った。



曾木ダム

《大阪の小学校での事件》

私のお父さんは、堺では大砲の弾か鉄砲の弾を作っている軍需工場へ通っていた。お父さんは朝鮮から先に来て勤めていた。朝鮮人は多かったね。

当時、上着のポケットに鉛筆を削ったりする為の小刀を入れていた。学校には朝鮮人の生徒3人がいた。日本人の生徒は掃除もせずに遊んでばかりで、私らが一生懸命していた。床をぞうきんがけしていた時、お尻をけられて、手がガクッとなって顔を思いっきり打ち、目から火花が散った。それが発端だった。一番いじめる奴の机の中にあるクレヨンやら、椅子にかけてあるカバンやら、窓めがけて次々に投げた。ガシャーンガシャーンと。皆、逃げて行った。夢中になって投げつけている所へ、担任の女の先生がやって来た。止めようとした先生の腕を振り払った時、ブスッと手応えがあった。先生は職員室の方へ行った。私は一番いじめる奴を追いかけたが、つかまえられなかったので思い切りちぎったり、投げつけたりして気が済んだので家へ帰った。それまで、本当にいろいろあったから……

その夜、腕を吊った女の先生と教頭が家へ来たけど、お母さんはあまり日本語ができないので、常会長さんと呼んで来た。常会長さんは50位の軍隊帰りの人だったが、いい人だったねえ。教頭はこんな狂暴性のある子は学校に来てもらっては困ると。常会長さんは何でこんなことしたと聞くので、私は泣きながら事情を説明した。教頭が警察に行こうと言うので、行った。警察ではまた、泣きながら今までいじめられたことを訴えた。それを聞いていて常

会長さんが、この子がこんな乱暴なことをした理由がわからないのかと言った。警察の人も、もっと子供の気持ちを理解してやらなければいけないと学校側に言った。常会長さんは、家でも乱暴だったら親の責任であろうが、この子は家では小さい子の世話をするいい子で喧嘩なんかするのを見たことがない。学校でそんなことをしたんだから、これは学校の責任だ、と机をたたいて言ってくれた。警察もその言葉に同意してくれた。

2, 3日してから常会長が来て、自分がいっしょに学校へ行くからついて来いと言われた。私はしぶしぶついて行った。学校へ入ると、先生も同級生も何も言わない。以前みたいにつついたり、にんにく臭いとかチョーセンとかもちろん言わなくなった。私を怖い者扱いしてだれも何もしなくなった。

《終戦前に大阪から田井へ》

こちらの小学校に来てからしばらくはおとなしくしていたが、そうすると皆がいじめた。6～7人もしていじめるのでどうにもならんから、ある朝早く出て道で待ち伏せして、一番いじめる奴を谷へつき落とし、鼻血が出るまでなぐった。それで、田井でもだれも自分に手を出す者はいなくなった。

仕事の内容は、子供だったからよくわからないが、カンテラをさげて出て行く人や戻ってくる人がいたのを覚えている。終戦前に工事が終わったので、行く先のある人は出て行ったが、私達は行く所がないので残っていた。牛のとさつの許可をもらって、牛を買ってきてさばいて肉を大東や大阪へ売るということを、残った人達でやっていた。だから肉は十分に食べられた。干し肉にしても食べた。

昭和25～26年頃(14歳)大社に出た。地震で壊れそうな家を借りて直して入った。どぶろく、焼酎、清酒まで作っていたら、税務署にあげられた。(笑)結局、当時のお金で7万円位の罰金を払った。古鉄を集めるといいお金になったので、2tトラックで古鉄を集めて歩いた。

大社で初めて家を建てた。出雲のとさつ場から内臓を買ってきて、大社の家でそれを量り売りしながら、家で小さな焼肉屋を始めた。そうしたら日御碕の方へ釣りに行く人達が帰りに寄って、それが評判になって出雲へ店出しするように勧められた。なかなか店ができなかったが、ある人が400坪の土地を世話してくれて、それで今の所(出雲の9号線沿いで焼肉屋さんをしておられる)へ店を建て、倉庫を建てた。その間にお父さんが、交通事故で亡くなった(59歳)。

自宅近辺の水路建設工事や朝鮮人の苦しい生活

証言者：石田一郎さん（74歳）（雲南市木次町在住）

2008年 1月20日

於 水田下導水路・現場にて

【集会所下の駐車場で】

私が小学校3年生ぐらいの時のことですので、もう忘れたことも随分ありますが、ここがあの工事現場でした。そこに石垣がある、そこが隧道の入り口になっていて、左と右と抜いて、あの山の真下を通過して平田のダムの上まで続いておった。ここからまたあの山の頂上付近をねらってその真下をこの隧道が抜けていまして、西日登の発電所へつながっています。それでこの谷はこの隧道のずりで埋めてこんなになっていますが、もとはすごい急な谷でした。

Q（ここで働いていた人は、日本人以外に朝鮮の方が多かった？）

いわゆる監督とか管理職なんかは日本人だったです。朝鮮の人は、夫婦二人のところに、多い場合は12～3人の独身の人がおられて、ひとつの組長みたいな形で、食事の賄いをしておられたように思います。当時は我々も農業をしておっても、徴用されて米を食べないで、くず米だけ食べているような時代でしたから、もう、工事で来られた朝鮮の人なんかは、殆ど食べ物がなくて道端の草なんか食べられて。あとジャガイモとか南瓜を塩汁で。味噌も醤油もないですから。そんな雑穀を食べておられたように記憶しております。

【下の飯場があったところ】

Q（総数でどれくらいいらっしゃいましたか？）

私の子供心の記憶でははっきりわかりません。戦前は、私が覚えている範囲では、もっとおられたと思うんですけど、20～30人位だったように。

その後もっとおられたと思うんですけど。下の川端に長い飯場があったんです。それで、子供もおりましたから遊びに行きよったんですよ。そのときに初めてオンドルというものがわかったんです。

座を張って、ここで使ったセメントの袋なんかで粘土の上に張って、

それで下で火を焚くと煙が通るようになって。ウワーこりゃー温かくていいなーと思って遊んだことを覚えています。

もうひとつ下の谷の奥でも飯場があって工事場があったんです。戦後の工事だったか定かでないんですけども一人は確実に亡くなっておられますね。戸板に乗せて泥まみれな人が運び出されるのを子供のときに見た覚えがありますから。戦前のことですね。朝鮮の人を。



16.jpg

水田の下を走る導水路

夜昼なしの24時間仕事で、ここから工事現場までバラバラと歩いて行かれたんです。

Q (子供さんのいる家族はおられましたか?)

子供さんは5人くらいおりましたかね。この上に小学校がありまして一緒に通いました。分け隔てなく遊びました。子供のことで、なんという事はなかったです。

国道の上の山手に一間の小さな小屋があって、そこで老夫婦が、それも朝鮮の人だったですけれども、どぶろくを造って、それで仕事をする人が気晴らしに買って飲まれていたように思います。

この下の飯場には朝鮮の人だけでしたね。日本発送電株式会社でしたね。この仕事が終わるまで朝鮮の人らはおられましたから、戦後の26~7年位までおられて、工事が終わったら皆いなくなりました。

つらい仕事される人は本当に惨めでしたよ。食べ物もない。着物もない。お金がないから。だから本当に上着一枚でボロボロで、それで隧道に入って仕事しておられたのを覚えています。おそらく、もらうお金ってわずかなものだったかと思います。

Q (隧道って直径がどれ位あるものでしょうか?)

私のはっきり言えませんが、3m位あるんじゃないですか。トロッコに乗せてきたモルタルを投げ上げる台を中段に作って、セメントをトロッコからスコップで跳ね上げるんです。その上の段に、またその上の段に、その上の段、型を組んだ間にセメントを入れておりましたから、それ位の高さがあるんです。3m以上は充分あります。

【お祖父さんが逃亡の手助けを】

(早速ですが、逃亡のお話を?) その人は、少しはお金を持っておったような感じの人で、独身の陳さんという人でした。仕事のないときには、うちへも時々よってはお茶を飲んだりされていました。僕が一番覚えているのは、何かこう小ぢやかな竹の皮の包みを持って寄って、これ開けていいかな?何か出してみ一、とおじいさん、おばあさん。恥ずかしくて恥ずかしくてと言ってなかなか出さんですよ。そしたら、開けてみたら牛肉が入っていた。少し。それは持って帰って食べた方がいいじゃあないかといったら、大勢の中でこんだけ食われへんと。それで、その頃油も何もない時代でしたから、どうして食べられるようにしたかようわからんですが、うちで食べられるようにしてあげて、旨い、旨いと言って食べられたのを覚えています。

そういうことも重なっているうちに、うちのおじいさんに、広島に友達がいるのでそこに行きたいと話されたようです。それで本当にその友達のところへ行きたいかと。どうしても行きたい、とてもとても難儀でいけんし、その友達のところへ行けばまだなんか良いこともあるかもしれん、と話されたようです。

このすぐ下の家に「西村ようぞう」というおじいさんがおられ、掛合町からここへお婿さんに来た人でした。飯場があった所の橋を渡ってずーと山を越して掛合町の谷村すずきという所へ出る道があるんです。昔はバスもない時代ですから歩いて実家の方へ行ったり来たりされていて、掛合へ出る山道を知っておられた。その下のおじいさんに夜中の道案内を頼んで逃がしたようなんです。今日は飯場が休みだから、みんな酒を飲んで夜の11時位には寝てし

もうから、その頃に飯場のすぐそばを通らないといけん訳です。

それでどうして準備したかわからないですが、米を2～3升位の量だったと思いますが、袋に入れて持たせて、夜中の11時頃（なんやら、子供の頃聞いて覚えておりますが）、皆が酔っ払って寝静まった頃にそこを通過して、あの山越して、夜が明けるまでに、もうなるべく広島に近いところまで歩かないけんぞと。そのときに地下足袋、半日も歩けば穴のあくような地下足袋を履いておられたよう気がします。なるべく一生懸命歩け、とにかく歩けというようなことで、米を持たせて逃がしてやっただです。

で、その頃は広島へ着いたからといってはがき1本もない。官憲にわかったら大変なことですから、もうそれだけで音沙汰ないです。僕は今でも思いますよ。逃がしてあげたのはいいが、途中で捕まってなければよいが、逃がしよかったものか？悪かったものか？どうだったろうかな？ということ。

Q（翌日は大騒ぎになりましたか？） 子供のことでですからわかりません。昭和17年か18年だったと思います。戦時中の戦争の真っ最中の強制連行だから、逃亡するとかなり殺される、と言っておられたような気がします。（おじいさんは勇気があったもんですね。）まあそういう感じの世間では偏屈じいさんで通っていたけど、そういうことをするお祖父さんでした。

【喧嘩もしたけど朝鮮の子供と飴作るんですよ】

田井に「テレメン工場」がありましてね。テレメンとは、松の根から油をとる「松根油」のことです。そのテレメン工場がありまして、川沿いに飯場形式で、朝鮮の人が5～6世帯位いまして、男の子がたくさんおったと思いますが、「徳山」という私らと同じ歳くらいの子しか覚えんですが。僕がよう喧嘩しよったですよ。川の向こうとこっちで石投げしたりして。そのくせ、朝鮮の子供と飴作るんですよ。山柿にとって、袋に入れて学校から帰りに、教科書なんか全然持って帰らんですから、柿を取って鞆に詰めて次に袋に入れて日が暮れるまで遊べます。それで、湯村温泉の川端で湯が出ますから、日が暮れて人がいなくなった頃に川端の砂を掘って、湯の出る所で浸けて上へ石載せておいといて渋抜きし、今度、朝、暗いような時に朝ごはん食って学校へ行くようにして出て、川端で引っ張りあげて、分けっこするんです。鞆に入れてね。それで、福山さんらと飴と交換するんです。平田の方の工事現場の朝鮮の子供たちとも、柿をやって飴をもらうんです。僕の鞆には、柿か飴しか入っとらんだったです。

土建会社幹部の生活実態や朝鮮人に対する傲慢な態度

証言者：田中初恵さん（雲南市木次町在住）

2008年 1月20日

於 木次町湯村の朝鮮人集落跡にて

隣の渡辺さん（疎開してきた家族）のところには、1年上にも下にもおったですから、子供ですからそこへ遊びに行つて庭の方を跳び回つて遊んだものです。それで、その家にはお肉とか砂糖とかたたくさんあって、隣ですからうちはそういうものをもらった。祖父が家で留守番をしとつたら隣の渡辺さんが肉を持ってきてごされて肉を持ってきた言うことを大阪弁だから発音が違いますから、肉・肉つて言うだども、お肉持ってきたと。聞いたらこれを焼いて食べなさいませ、美味しいから、と言われ、母が仕事から帰つて、七輪（しちりん）に網をのせて焼いて食べました。ボゴボゴも燃えましてね。子供だから食べたいですが。醤油つけて食べました。こげんうまいもんはどこの肉だーかと言つて。そんな笑い話があるけど、特権階級ですね、森本組の組長ですけんね。

それからお雛様節句などにも呼んでいただいて。そうすると今あるような黒豆を汁がいっぱいあるようにして食べさせる。子供ですから遠慮がないですから、豆も汁もしっかり食べたりして。汁が残っていたので家に持つて帰つて母なんかに食べさせると喜ぶなあと思つて見とつたら、ざあ一とこうして捨てられましてね。いやあと思つて汁の流れるのをジ一とこうして見とつたです。そんな思い出があります。それぐらいトップの人は贅沢しておられたみたいで。先生から、「なくても我慢せー、我慢せー」と教わつたです。でも、その時子供ながらにして思つたです。学校の教えは嘘だわ、贅沢している人もいるんだわ、とね。そんなことで何ぼ10歳余りの子供でも、差別だわ、と思つた。やっぱりあるところにはあつたんだわ、と。

隣に韓国からお嫁さんにこられた人がいました。その家は昔からの旧家ですごい家でしたけど、保証人で倒れたから、こっちで生活が難しくなつて韓国に渡つて。1919年の3月1日から始まつて約1年続いた3・1独立運動の時、日本人だった「いさぶろうさん」は身に危険が及んで現地の人に親切にかくまってもらつて、その娘さんが彼の妻で、日本名は「えいこ」と呼ばれていました。4人の息子さんと1人の娘さんに恵まれて子供を連れて日本へ帰つてきた。



山の中腹を走る導水路

彼女は非常に美人であつて働き者でした。日本に来たときには日本語がわからず胸をかきむしるようであつた。私が知るようになってからは流暢な日本語だったが、チョゴリを着られたのを見たことがない。それは悲しいことだ。日本人は朝鮮人を差別・虐待したのだから、彼女は愛情で結ばれて日本人の妻になつたのに、日本に来て差別されようとは夢に

17.jpg

も思わなかった。だからおおよげに朝鮮民族のことは決して話されなかった。

私は隣に住みながらもっと彼女からいろいろなことを学んでおけばよかったと悔やまれるのである。細やかに気をつけていただき可愛がってもらったことを思い出している。

差別と排他的な目に耐えかねて、彼女は夫と別居して6 km離れた山の中に居を移して、そこで精米所を営みながら子供を育てた。この「いさぶろうさん」は末っ子と二人で農業しながら暮らしておられたのである。頭脳明晰な彼女には、皆、素晴らしい頭の良い子がおられた。特に長男は工業高校を出て東京の三菱専門学校（今の理科大学）を出て、病気になられ惜しくも学業途中で急逝してしまわれました。息子の死を悼んで墓地の周りに桜の木が植えられた。その根元に座した彼女は老いてもなお息子さんの死を悼み涙で目をしょぼしょぼさせながら、思い出を私に語った。だから息子さんも差別されたと。日本人だと言い張っても、お母さんが朝鮮人だということで、ほんに差別を受けたもんですよ。

朝日新聞 2008年1月21日 第3種郵便物認可 享



「労働つらく 逃亡手助け」

雲南の住民証言

戦前の韓国・朝鮮人の暮らし

雲南地域で戦前、発電所建設などに従事した韓国・朝鮮人の歴史を調べている市民グループ「日韓市民友好と地域の国際化を考える会」（江角秀人代表）が20日、地元住民2人の証言を聞いた。証言したのは、雲南市木次町湯村の石田一郎さん（74）、同町寺領の田中初恵さん（78）。

石田さんによると、湯村地区では戦前、発電所に通じる水路のトンネル工事で、日本人監督の下で韓国・朝鮮人が働いていた。事故で死んだ労働者の泥まみれの遺体がトンネルから運び出される様子も見たといい、石田さんの祖父は、知り合いの労働者の一人から「仕事が難儀だ。広島の方たちのところへ行けば、良いことがあるかもしれない」と相談を受けた。祖父は山道に詳しい近所の男性を紹介し、峠を越えて労働者を逃がしたという。

祖父に危害が及ぶ恐れもあり、その後、労働者から連絡はなかった。石田さんは「広島に無事着いたかもわからず、逃がしたことが良かったのか、悪かったのか。今でも考えます」と話した。同会はこうした証言を集めて、韓国・朝鮮人の生活跡をたどる見学コースを設ける計画。今年夏には地元で亡くなった韓国・朝鮮人犠牲者の慰霊祭も予定している。

戦時中の韓国・朝鮮人らの暮らしぶりなどについて語る田中初恵さん（左から2人目）と石田一郎さん（同4人目） 雲南市木次町湯村で

2008年1月21日朝日新聞

5. 雲南地方で暮し終戦後、韓国へ帰国した金 時出(キム シチュル)さん

金 時出(キム シチュル)さんは、1944年(昭和19)2月2日に雲南市木次町内で死亡し現在、木次町西日登の満福寺に眠る韓国人 姜 植伊(カン・シギ)さんの四男です。

2005年5月、私たちは満福寺に眠る姜さんの墓碑にある主人の金 夫介さんの韓国の住所を手掛かりとして、在日韓国民団島根県地方本部や韓国広島総領事館、韓国慶尚南道居昌郡高悌面(コゼミョン)役場にご協力をお願いし、遺族を探しました。だが、調査が容易に進まないために、2006年11月、当会の会員二名が韓国 居昌郡高悌面役場を訪問したところ、遂に金 時出さんの戸籍と現住所を手にすることが出来ました。

以下は、2006年11月と2007年3月、韓国ソウルで金 時出さんにお会いし、当時の雲南地方での生活などお話をいただいた。(金さんは日本語を忘れ、韓国語でお話)

【金 時出さんの証言】

2007年3月10日(土)

韓国 ソウル/インサドンの喫茶店にて

1. 金さん一家の家族や生活のことなど

私のお父さんとお母さんが結婚したのは、日本の広島かどこかで、都市ではなかったと聞いている。私の家族は多数で父と母、7人の兄弟と姉がおり、さらにおばあさんも同居していた。私は19365年(昭和10)生まれで、日本の敗戦当時は10代前半であった。詳しいことは知らないが、私の兄や姉は広島など日本生まれであった。父は韓国 慶尚南道居昌郡高悌面の出身で、母は慶尚北道大邱生まれだった。お母さんは貧しい生活の中で、お父さんと共に働きずくめで大変な苦勞をした。時期は不明だが、親は親戚を頼りに韓国から広島に移住して来たと言っている。その後、広島県から島根県へと引っ越した。(当時、韓国人は日本から日本名を持つように強制された。「創氏改名」という。日本名「金本 静夫」だった金時出さんの家族は2008年4月、雲南市立加茂小学校のご協力により閲覧させていただいた学籍簿によると島根県美濃郡匹見村へ、その後に、大原郡日登村引野、そして、1945年(昭和20)7月には大原郡加茂町宇治へと移住している)。



金 時出さん

私たちの生活はいつも苦しく、お父さんが肋膜炎(ろくまくえん)という病気にかかった時は、お母さんが一人、仕事に出て生計を立てるなどずっと苦しい生活の連続だった。お母さんが仕事でいつもいないので、姉が子供の世話をしていた。ある時は食べ物がなく、カエルやヘビをとって食べたこともあった。当時、私らはどれほど白いご飯を食べたかったことか!

私は広島生まれだったが、1945年には島根県大原郡加茂町へ移り住み、加茂町国民学校へ通った。当時、私は国民学校4年生であったが、家庭は貧乏で、また、日本人からの差

別もあり、生活は本当に厳しく辛かった。私の家にはお母さんの母親、つまり、おばあさんも一緒に住んでいた。私たちの両親は7人の子供に食べさせたり、服を着せたり、勉強させたり、本当にとっても苦勞していた。そして、終戦まで大原郡加茂町に住んでいたが、生活はいつも苦しかった。

2. お父さんのことやお母さんの死亡のことなど

お父さんは地元の仕事がないので、よく長期間、島根県外に出かけて仕事をしていることがあった。こうして商売などでよそに出かけた折には、野宿をしたり、家の軒下で雨宿りをしていたという。また、お金持ちの家に井戸があり、水を汲まないと水が腐るので、水を汲んであげたら、お礼に米やたくわんをもらって食べたこともあったなど、お父さんはいろいろな話をしてくれた。



20.jpg

いつか、お父さんが土方の仕事から家に帰って来た時、体を見ると「ベルトでたたかれた跡」を見たことがあった。また、お父さんが土方の仕事をしている時に、その体中のあちこちにアザが残っていたことを今もよく記憶している。

1944年(昭和19)の冬、雪がたくさん降っていたある日、学校で勉強中に先生がお兄さんやお姉さんと一緒に私のところに来て、「おまえのお母さんが病気になったので、すぐに家に帰りなさい」と言われた。このため、雪にはまりながら家に帰った。家で、お母さんを見ると体に泥が付いていた。そして、死んだお母さんを寺の近くに埋め、木製の墓標を建てた。

お母さんが死んだ後、お父さんは元気を取り戻し、山口県の下関で塩の商売をしていた。私は、夏休みや冬休みにお父さんの手伝いに下関に行ったりもした。また、戦争中のため、油がないので、お父さんは松の木を絞り、その松の脂から油を作る仕事もしていた。このように、お父さんは一生懸命に働いていたが、私たち子供の生活も実際、大変であった。私たちは食べるものがない中で、豆腐の原料である大豆をもらったので、兄姉に食わせたところ、みんな病気になってしまったこともあった。とにかく、食生活は言葉に表すことが出来ないほど空腹の状態でした。さらに、苦勞だったのは「朝鮮人」という烙印(らくいん)を押されたことが、何より屈辱的であった。

3. 終戦により韓国へ帰国！韓国での戦後の苦しい生活など・・・

お父さんは日本での貧しい生活の中、少しでも余裕ができると韓国慶尚南道居昌郡高悌面のお父さんの兄弟で私の叔父さんあてにお金を送り、実家の土地に大きな家を建てた。

1945年(昭和20)8月、終戦。その翌月の9月に私たちは韓国へ帰国した。まず、お母さんの大邱(てぐ)の実家へ寄ったが、私たちはお金を持っていないので歓迎されなかった。このため、お父さんの実家がある居昌郡高悌面でお父さんが送金して建てた叔父さんの

家に帰った。だが、生活が苦しいので、お父さんと長男はすぐに商売のためソウルやプサンに出かけて行った。そこでの商売により多くのお金を稼いだが、大邱でゲートルに入れていた大金を泥棒に盗まれるなどの失敗もあり、お父さんは苦労の連続であった。

一方、高悌面の叔父さんの家にいる私たちに対し、叔父さんはお父さんが家に帰ると待遇を良くしたが、お父さんがいない時はご飯も食べさせてもらえず、酒のカスを食べさせられた。このように叔父さんの家での生活は十分な食料を与えられず、いろいろ虐待された。

寒い冬のある日、弟があまりの空腹に耐えられなくて盗みを働いたために、大きな木に一晚中つるされた結果、寒さにより死亡した。このため、兄姉を始め、みんなが叔父さんを怖がり、ここから逃げ出して行った。

また、お父さんと共に苦労を共にして来た長男は、韓国(朝鮮)戦争に兵士として従軍し戦死し、次男はこの戦争で行方不明になり、2度と合うこともなかった。私は別の親戚の家に引き取られ、中学・高校・大学と苦労をしながら勉強し、卒業後、今のガス会社に入社し、全国でも数少ないガス技術士の資格をとり、今では会社役員にまでなった。また、私はキリスト教に入信し、キリスト教会の活動も熱心に続け、今日、地域のキリスト教会の最長老になっている。このように、今では恵まれた環境の中にいます。



21.jpg

金さんの旧実家前にて

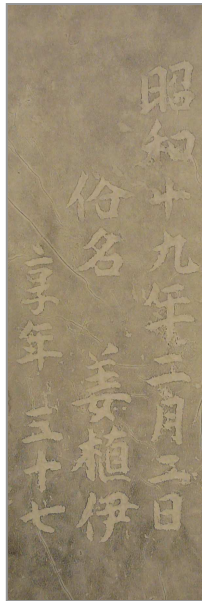
満福寺に眠る姜 植伊 (カンシギ) さんのお墓



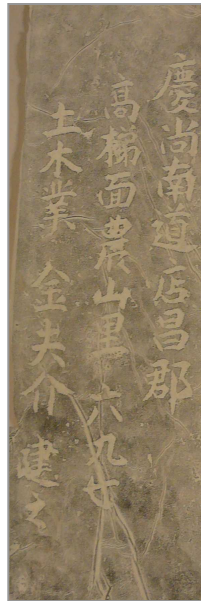
22.jpg



23.jpg



24.jpg



25.jpg



26.jpg

6. 私たちのこれからへの想い・・・・・・・・

アジア大太平洋戦争期における雲南地方の発電施設建設事業に伴う韓国人等の労働や生活などについて、この記録集で8人の方の証言を掲載し、当時の生活の再現を試みました。8人の証言は当時を知る貴重な証言であり、大切に保管する必要があります。建設現場や集落生活の実態など8人の当時の年齢もあり、詳細に描けない部分や資料不足もあります。

雲南地方における調査、資料収集など私たちの取組みは未だ不十分な段階にあります。私たちは雲南地域に埋もれた当時を知る方々の証言により、韓国人等の戦前、戦中、戦後における日本や韓国等での生活調査を通じ、その当時、彼らに起きた出来事を明らかにし、日本や朝鮮半島、東アジアに対する雲南地方や島根との交流史から見えてくるものを考え、これからの日本と朝鮮半島、アジアとの平和友好関係をどのように形成していくのか・・・日韓両国で多くの人々とそのことを語り合い、日韓友好活動を進めていきたいと考えます。

そのために、今回の記録集を充実させ、わかりやすくコンパクト化した小冊子を発行し、ダムや発電所、水路など発電関連施設に当時の建設事業史説明版を設置する一方、雲南の地を訪れる韓国人等の方々を含め、住民の皆さんが過去の出来事を学ぶ現地見学コースを設定・整備し、雲南・島根、日本と韓国・朝鮮半島との関係を考えて頂く「一つの機会」を提供していく計画を構想しています。そして、私たちは地域における韓国など朝鮮半島出身の方々との交流や学習を更に進める一方、韓国へ積極的に出かけ、日韓市民交流の輪を創り、ヒトと文化の交流から相互信頼関係を醸成し、産業交流も展望するなど島根・日本と韓国、朝鮮半島との善隣関係構築の「一つの活動体」として歩んでいきたいと考えます。

この
「アジア太平洋戦争期における島根県雲南地方における韓国朝鮮人の生活記録」
を

島根県雲南地方における開発事業等における事故等により犠牲となられた

全ての御霊に進呈いたします

2008年11月

日本韓国の市民友好と地域の国際化を考える会

編集 発行

日本韓国の市民友好と地域の国際化を考える会

代 表 江角 秀人

住 所 島根県松江市学園2丁目3-27-81

連絡先 電話 090-9733-0910